



ドクター・ハザマの

バイタルサイン塾

薬剤師の特性を活かす「PDCA サイクル」

ファルメディコ株式会社
 大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
 医師・医学博士 狭間 研至

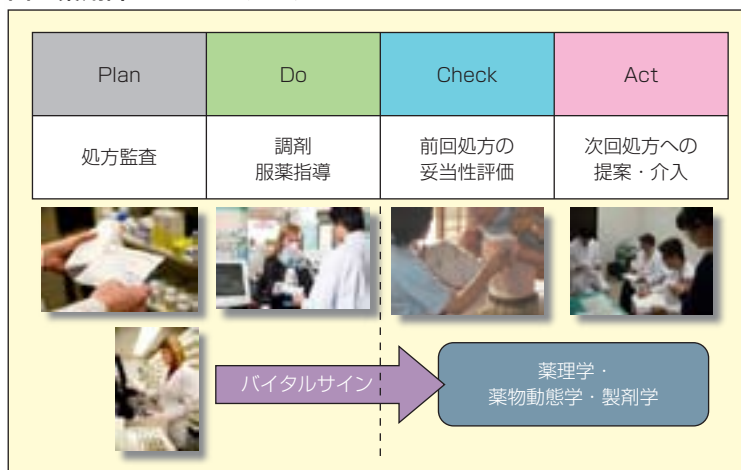
医薬分業開始から30年 これまで回してきた PDCA サイクルとは

誤解を恐れずに言うならば、病院・薬局を問わず、薬剤師が医薬分業開始からの30年間回してきたPDCAサイクルは、処方せんを応需して、迅速・正確に調剤し、的確な服薬指導とともに患者さんに正しくお薬をお渡しするという業務のQualityを上げることだったのではないかと思います。

同時に、いわゆる調剤薬局業界は、医薬分業率の進展に伴って急速に市場が拡大したため、種々のマネジメントを必要としました。人材マネジメントや経営マネジメント、さらには調剤業務のQuality Controlの一環としてのリスクマネジメントや業務マネジメントです。

これらによって、保険薬局で均質的な調剤業務が行えるようになり、わが国における医薬分業制度のインフラとして機能するようになったと言えます。分業黎明期に試行錯誤を繰り返しながら現在の薬局業界を作られた先達の先生方の、素晴らしい成果だと思えます。

図 薬剤師のPDCAサイクル



© Kenji Hazama, M.D., Ph.D.

ただ、このQuality Controlの成長曲線がプラトーに達しつつあることが、現在の薬剤師(とくに薬局薬剤師)が感じる閉塞感、手詰まり感につながっているのではないかと思います。

バイタルサインを採ることで向上する 薬剤師のPDCAサイクル

さて、前回からお話ししている薬剤師のPDCAサイクルを図に示します。

処方せんを受け取ってからお薬をお渡しするまでは、医療行為全体から見れば、私はPlan(処方監査)、Do(投薬)というところで止まってしまっていると考えています。調剤過誤がゼロになり、素晴らしい服薬指導の結果、コンプライアンスが保たれたとしても、それは医療においてはDoで止まってしまっているのです。

薬剤師がバイタルサインを採ることは、自らの手でCheckができるようになるということです。Checkはもちろん、手を動かすだけでなく、得られたデータをもとに頭の中で考えた上で、平成22年4月の厚労省医政局長通知にあるように、処方提案や処方設計への介入というActに移れるわけです。

薬剤師がPDCAサイクルを回すことによって、薬剤師が他の医療人にはない特異性を有する薬理学・薬物動態学・製剤学の知識が活かせるようになります。これは、超高齢社会の地域医療レベルが向上することにつながります。また、薬剤師にとっては、薬剤師冥利を実感し、組織人ではなく医療人としての真のやりがいを感じられるようになるのではないかと考えています。